

タイトル	まえがき(<特集>共同研究報告：近代日本における文化・文明のイメージ)
著者	永井，秀夫
引用	北海学園大学人文論集，6：75-76
発行日	1996-03-31

近代日本における文化・文明のイメージ

まえがき

以下の7篇の論考は、1994年度における日本文化学科の教員による共同研究「近代日本における文化・文明のイメージ」の成果の一部である。

日本文化学科にとっては、日本文化の特質、とくに近代化過程の中での西欧文明の受容とそれに伴う伝統文化の変容の問題は、中心的な課題であり、広くかつ重い問題である。私たちは、言語・文学・歴史・思想・芸術その他の多様な分野を専攻しており、かなり学際的な性格を持っている。そこで、私たちが協力して日本文化の問題に近づく糸口として、日本近代化過程の中で、文明および文化の概念がどのように認識され、受入れられたか、という問題を中心に置くことにした。そのために、数回の研究会を重ねたが、各自の研究関心や研究方法も異なるため、その成果は文明や文化の認識の問題を取上げるに止まらず、広く西欧文化の受容や、文明と未開の接触の問題にまで及ぶことになった。

一方、この共同研究は、辺境文化の問題を視野に入れようとしている。日本近代文化の強力な統合・同化の過程の中で、辺境の文化がどのような影響を受け、どのような役割を果たしたかといった点である。私たちが北海道に基盤を置いているからでもあるが、辺境や地方とのかかわりの中に、日本近代化の一面が示されるのではないかという期待があったからである。そのため、私たちのうち、永井秀夫、菱川善夫、菅泰雄、船岡誠、須田一弘の5名は、1995年2月に沖縄調査を試みた。沖縄と北海道がそれぞれ異った性格をもつ辺境として、どのように中央の近代化とかわったかを比較したかったからである。以下の諸論考の中にはその成果の一部がふくまれている。

それぞれの成果について簡単に紹介しておきたい。竹岡和田男「黎明期の西洋画事情 覚書〈長崎―秋田―函館〉」は、この3つの地域のそれぞれ

異った事情の下で西洋画法が伝えられ、普及定着するに至る経過を比較検討したものであり、千葉宣一「日本文学の近代化に及ぼした進化論の影響——江戸文学から明治文学へ——」(原題)は、日本近代化への思想的離陸は進化論の導入とともに開始された、という立場から、江戸から明治への文学思想の転換への進化論の影響を論じたものである。今回の発表は中国語訳の形をとっている。

永井秀夫「辺境の位置づけについて——北海道と沖縄——」は、日本の南北の周縁部である沖縄と北海道について、辺境論、内国植民地論などを再検討しながら、中央権力・中央文化による差別・統合・同化などの作用とそれへの対応について述べたものであり、菅泰雄「沖縄と北海道の言語生活(共通語化と方言)——沖縄と北海道の比較研究に向けて——」は、両地域の共通語化の過程を検討し、方言使用意識や方言復興への取組みなどの実情を報告して、両地域の歴史的・文化的背景に裏付けられた言語生活の比較検討への手がかりとしている。また須田一弘「『文明』がやってきた——パプアニューギニア・クボの場合——」は、「文明」と「未開」が接触した場合、何がおこるか。文明への単線的な進化を信じ、文明を普及することを使命と考える外来者の視点ではなく、未開の側に立って、文明とキリスト教を受け入れることがどういうことなのか、どのように伝統文化と折合いをつけるかを考えようとしたものである。

菱川善夫「明治三十年代の文明論 文明批評の成立と展開〈1〉」は、明治文化の啓蒙期を抜け出して本格的な文明批評が成立した時期に、どのような文明に対して、どのような仕方で批判が展開されたのかを、高山樗牛や姉崎嘲風に焦点をしぼって追求したものである。また徳永良次「北駕文庫蔵書の伝来について——仏書からみた文庫の形成——」は、札幌のような近代化都市の中で、和漢書・仏典のような伝統的典籍がどのように集積されたかを検討したものである。

以上の諸成果は、序論の段階に止まっているものもあり、論点も多岐にわたって未だ集約の労を経たものではない。私たちは、この共同研究をさらに継続して深めて行くつもりである。(永井 秀夫)